

I-A-14

潰瘍性大腸炎に対する柴苓湯の効果

山口病院内科¹⁾、町田市民病院内科²⁾、松島病院大腸肛門病センター³⁾

○松生恒夫¹⁾、山下知之¹⁾、金崎章²⁾、牛尾剛雄²⁾、鈴木康元³⁾、西野晴夫³⁾、渡辺豊³⁾、松島善視³⁾

〔目的〕 現在、潰瘍性大腸炎（UC）の薬物療法には、副腎皮質ステロイド剤（プレドニン[®]、リンデロン坐薬[®]）、サラゾピリン[®]等が用いられているが、再燃をくり返し治療期間が長期におよぶ症例が少なくない。そこで、元来夏の下痢治療に処方されてきた柴苓湯を、UCの病能改善、ステロイド剤の減量およびUCの再燃予防を目的として投与し、その効果を検討したので報告する。

〔方法〕 対象はステロイド剤投与中のUC 40例（男性20例、女性20例）で、平均年齢は 37.7 ± 12.8 才であった。以上の症例に対して、ツムラ柴苓湯9.0g/日を投与し、投与剤と3ヶ月後の自覚症状、大腸内視鏡所見、およびステロイド剤の投与量を比較し、UCに対する病能改善効果および、ステロイド剤の減量効果について検討した。

〔結果〕 (1)自覚症状：①下痢は32例が存在し25例（78%）に改善を認めた。②下血は28例が存在し21例（75%）に改善を認めた。(2)内視鏡所見：①発赤は38例が存在し、24例（63%）に改善を認めた。②出血は24例が存在し17例（71%）に改善を認めた。③びらん、潰瘍は13例が存在し8例（62%）に改善を認めた。(3)ステロイド剤の減量効果：プレドニン[®]の投与量の平均値はツムラ柴苓湯投与前 25.5 ± 13.3 mg、投与後 7.5 ± 7.0 mgで、リンデロン坐薬[®]は、投与前 1.44 ± 0.49 mg、投与後 0.97 ± 0.63 mgであった。ステロイド剤の減量が可能であったのは、40例中21例（52.5%）で、うち14例ではステロイド剤の投与量を50%以下へ減量でき、さらには10例でステロイド剤離脱が可能であった。(4)副作用：2例（5%）に悪心が出現し、投与継続不可能であった。

〔結論〕 (1)ステロイド剤併用中のUC症例にツムラ柴苓湯を投与し、その自覚症状、内視鏡所見にて改善を認め、一部症例はステロイド剤の減量離脱も可能であった。(2)以上の結果は、柴苓湯の含有する柴胡や甘草などの生薬の薬理作用の相乗効果が、ステロイド剤の効果を増強し、ステロイド剤の減量離脱を可能にすることを示唆した。(3)今後、柴苓湯の長期投与例において、再燃予防効果の検討が必要と考えられた。